

奥嵯峨野口マン散策の菜

当番の相棒、薄さんの強い希望によって佐藤が素案を企画し、二人で下見し決めました。

嵯峨野といえば、平家物語の悲恋の舞台となってきました。その三つをあげます。三つの物語とも、嵯峨野に隠棲しますが、嵯峨野は、都に未練を残しながら世を捨てたかたちをとるのに絶好の場所だったと思われます。

<小督局> 平清盛の娘建礼門院徳子(とくし、とくこ)は、清盛の政略により17歳で11歳の高倉天皇の中宮になります。彼女に仕えた琴の名手で絶世の美女小督局(こごうのつぼね)は、高倉天皇の寵愛を受けたことで清盛に疎まれ、嵯峨野に身を隠します。あきらめきれない高倉天皇は、笛の名手源仲国(なかくに)に探索を命じます。彼は、名月の夜、馬に乗って小督探索に出、人里離れた嵯峨野で遠く琴の音をきき、近づけば、「峰の嵐か、松風か、たづめるひとの琴の音か...」と「想夫恋」を爪弾く小督の庵でした。彼は、小督と合奏の経験があったのです。

彼女は、まもなく宮中に呼び戻され、天皇の子を身ごもりますが、徳子がまだなので清盛の逆鱗にふれて出家させられます。ときに小督は23歳、再び嵯峨野に隠棲します。高倉天皇は嘆き悲しみ、やがて清盛の政略で第一皇子が三歳で安徳天皇となるにおよび、21歳で世を去ります。

因みに、かつて高倉天皇は、徳子に仕える葵という童女を熱愛しますが、天皇が周囲の目をはばかり召さなくなったことで彼女が急死します。嘆き悲しむ天皇を見かねて徳子が引き合わせたのが小督でした。

しかし、小督は、徳子の妹の夫、冷泉隆房の昔の恋人であり、隆房は宮仕えした小督に何度も恋文を送ったりしますが、小督は、それを投げ捨てたりします。娘婿ふたりを手玉にとって恋敵とさせたうえ、天皇の子までなした小督の振舞いに、清盛が激怒したのは、むりからぬことかもしれません。

(冷泉隆房の歌集『隆房集』には、宮中に召された小督と密通した和歌が残されています)

平清盛が病死すると、平家は源義仲に追われ、徳子も安徳天皇とともに三種の神器を携えて都落ちします。やがて平家は壇ノ浦の戦いに敗れ、徳子の母の二位尼は安徳天皇と三種の神器とともに入水し、徳子も海に身を投げますが救われ、捕虜となります。徳子は、のちに京都大原の寂光院で先帝と一門の菩提を弔う余生を送ります。

<祇王、祇女、仏御前>

清盛最盛の頃、京の町に祇王・妓女(ぎおう・ぎじょ)という評判の白拍子姉妹が居りました。彼は、早速、姉の祇王を召しました。そのため、妹・祇女さえ世間でもはやされ、母とぢにも立派な家を与えたのでした。

祇王たちのことを知った京中の白拍子が、彼女たちの破格の出世を羨んで、祇一・祇福などと、祇の字を付けて、祇王にあやかろうとする者さえ出てきたほどでした。

しかし、三年後、その頃都には、加賀の生まれで、舞の上手な仏御前という名の白拍子が名を馳せていました。年はまだ16才です。彼女は、「未だ、清盛様には呼んで頂けない」と単身、清盛が住む西八条の館へ訪れましたが、追い返されます。哀れに思った祇王が「見ればまだ年端もいかない娘。同じ道を歩む者として、お願いで御座います。どうぞ逢ってやって下さいまし」とりなし、仏御前は呼び戻され、「今様(流行歌)でも歌って見よ」と清盛が所望します。

君を初めて見る時は 千代も経ぬべし 姫小松 御前の池なる亀岡に 鶴こそむれいて遊ぶめれ

さすが都で名を馳せた白拍子、歌を聞いた清盛は、すっかり仏に魅せられます。仏御前が、帰ろうとすると、清盛は、「待て、ここを出ること相成らぬ」、といいますので、仏御前が、「わらわは、祇王さまの御口添えにて召し還えされた身、早々にお暇を下されませ」「それはならぬ。祇王に遠慮するなら、祇王を追い出そう」と同業のよしみで館に誘い入れた仏御前のために、祇王は館から追い出される羽目となります。

3年の間、住み慣れた館ですから、せめてもの形見にとて、障子に歌を書き付け、館を後にします。

もえいずるも 枯るも同じ 野辺の草 何れか秋に あはではつべき

わが家でただ泣くばかりの祇王に、母と妹が、「如何がなされた」と、尋ねますが、直ぐには返すこともできません。お付きの女に尋ねて、やっと事情が分かったのです。

八条の館では、今では仏御前やそのゆかりの者が、祇王らに代わって富み栄えております。明春、清盛から使者が文を携えやって来ます。

「祇王、変りは無いか。仏御前が退屈しているから、館に参って今様でも歌い、舞を舞って仏を慰めよ」との文に、祇王、どうしてよいやら、返事のしようもなく、ただ涙を抑えるばかりでした。清盛が、再び、「祇王は、なぜ、返事を寄越さぬ。参るのか、参らぬのなら、清盛にも、考えが有るぞよ」と脅しをかけてくる始末です。これを、聞いた母とちが、泣く泣く祇王に諭します。

「この世で生きるには、清盛様の仰せに背くことはなりません。それに、男女の縁のはかなさは、今に始まったことでもありません。この世に定め無きものは男女の仲。いわんや、そなたは遊び女の身、3年もの間、清盛様に想われていたのですから、有り難き御情けと思わねばなりません」

母を苦しめるよりはと、祇王は泣く泣く館に向かいます。案内された所は、粗末な部屋です。悔し涙が溢れ出るのです。仏御前がこれを見兼ねて、清盛に、「あまりにも非情です。早々に此处へ召されませ。さもなければ、わらわに暇をお与え下され」といいますが、清盛は聞き入れません。

やがて祇王に、清盛は、「祇王、変りは無いか。そなた、今様でも歌い、舞の一つも舞って仏を慰めよ」と、上機嫌で所望します。清盛に逆らうこともならず、祇王は涙を抑えつつ、即興の今様を歌うのでした。

仏もむかしは凡夫なり 我等もつひには仏なり 何れも仏性具せる身を 隔つるのみこそ悲しけれ

と、泣く泣く二度歌いますと、その場に居合わせた者、皆、感涙にむせぶのでした。

「今はただ都の外に逃れましょう」と、祇王21歳で尼となり、祇女も19歳で様を変え、娘が下ろすならこの母もとて、とちも45歳で白き髪を下ろし、嵯峨の奥の山里に庵を引き結んで、娘と共に念仏唱え後世を願って居りました。

七夕の夜、二つの星が巡り逢う空を見上げて、天の川に願いを懸ける頃、親子三人が念仏を唱えるところへ、竹の戸を叩く者があります。こわごわ三人が手に手を取って、竹の戸を押し開きますと、そこに現われたのは仏御前でした。

「あなたさまのとりなしがアダとなって、いずれは我が身に巡ることと知りながら、館に留められたことを、恥かしく存じます。その後は、清盛様のお情も嬉しいとは思わず、今日まで過ごして来ました。貴方様が障子に、”いづれか秋にあはではつべき”、とお書きになった言葉をその通りと思い、何処にお住まいやらと気にかけておりましたが、聞けば皆様が様を変えて一所に念仏されているとのこと、余りに羨ましく、また一時の栄華を誇って後生を知らぬ悲しさに、清盛様にはお許しも無いままに、出て参ったのです」と申して、被り物を取った仏は、髪を剃り落として尼の姿になっていました。「念仏して、一つ蓮(はちす)の身と成らせたまえ」「貴方がそれ程までに、思われていたとは露知らず、この身の不幸せとばかりを思っておりましたが、様を替えられた貴方の御姿を見て、日頃の恨みも歎きも失せました。今は往生も疑いません。今年わずかに17歳になった人が、それ程までにこの世を嫌ひ浄土を願うなどと深く思い込まれるとは、本当に悟りを開かれたのでしょうか。誠にうれしい仏の御導きです。さあいっしょに浄土を願いましょう」と、四人一所にこの庵に籠りました。

その後は、四人諸共に朝夕仏前に向かい、花香を供えて、余念なく浄土を願っておりましたが、時こそ違え、それぞれ目出度く極楽往生したと言うことです。

< 滝口入道と横笛 >

滝口入道とは、内大臣・平重盛(たいらのしげもり)に仕えていた宮中警護に当たる滝口(清涼殿の東北の詰所)の武士・斎藤時頼(さいとうときより)のことです。

時頼は、時の権力者平清盛(重盛の父)が西八条殿で催した花見の宴で、建礼門院徳子(重盛の妹)に仕えていた雑士女・横笛(よこぶえ)の舞を見て一目惚れします。その夜から横笛のことが忘れられず恋しさが募ります。恋しい自分の気持ちを、どのように横笛に伝えたものかと悩んだあげく、文に認め届けることにしました。時頼は、これま

で刀しか持ったことのない無骨者。書いては消し、書いては消して認めたその文は、やがて横笛のもとに届けられます。宮中警護を勤めるたくましい男性から愛を打ち明けられた横笛は、「この方を信じ、この愛を受け入れよう」心に誓い、二人は愛の契りを結びました。

これを知った時頼の父は「おまえは名門の出、将来は平家一門に入る身ながら、あのような身分の低い女に何故思いをはせるのか」と叱ります。時頼は、主君(内大臣)の信頼に背いた己を自責し、横笛に知らせることなく、19歳で嵯峨の往生院に入り出家します。時頼は、煩悩を捨て、一心に仏道修行を誓ったのです。

幾日も経たないうち、都の噂で時頼、滝口入道が出家したと知った横笛は、自分の心を打ち明けようと、あちこちの寺を尋ね歩きます。都を出る時に着てきた横笛の着物は、裾は濡れ汚れ、袖もほころび、次第にみすばらしくなっていました。ある日の夕暮れ、嵯峨の地へやって来た横笛の耳へ、僅かながら念誦(ねんしょう)の音が聞こえます。耳を澄ませて声の方向を見ると、闇の奥の小さな庵からであります。横笛はそっと近づき、念誦の声に「この声は、お捜しする滝口様」。はやる気持ちを抑え、表戸を叩き「滝口入道様、お願いでございます。お姿をお見せくださいませ。都から捜してまいりました」と声をかけます。声をかけたのは横笛の供の者。お供にそのように言わせ、自分は茂みの影で背をかがめて滝口の姿を一目見ようとしたのでした。

お供の声が届いたのか、先ほどまで聞こえていた念誦がぴたりと止み、しばらくすると一人の僧が静かに戸を開けて出てきて「そのような者はこの僧坊にはおりません、お間違いです」と言って姿を消した。茂みの影で横笛は「聞こえていた念誦の声は、間違いなく滝口様。なぜお姿を見せていただけないのか」と涙します。これは、滝口が同宿の僧を差し向けてそう言わせ、滝口はこの事のなり行きを襖の隙間から見つつ「会うは修行の妨げなり」と涙しながら帰したのでした。遠くから尋ね尋ねて、ようやく見つけた滝口に追い返された横笛の落胆はいかほどだったでしょうか。

横笛は泣く泣く都へ帰るが、真の自分の気持ちを伝えたいと、近くの石に「山深み 思い入りぬる柴の戸の まことの道に我を導け」と指を斬り、その血で書き記したといいます。滝口入道は、横笛に住まいを知られ、これからも尋ねてこられては修行の妨げとなると、すぐに女人禁制の高野山静浄院へ移ります。横笛はそれを知り、悲しみのあまり大堰川(おおいがわ)に身を沈めたとも、南都(奈良)・法華寺へ出家したとも伝えられます。

横笛の死を聞いた滝口は、ますます仏道修行に励み、その後、高野聖となり元暦元年(1184)、紀州の勝浦において平維盛(これもり)の入水に立ち会っています。

平維盛は、平重盛の嫡男。平家落ちにて西走。寿永3年(1184年)、屋島の戦いで源氏と対陣中、密かに逃亡。後、高野山に入り、まもなく那智の沖の山成島で入水自殺。美男で光源氏の再来ともいわれました。